

I 研究の概要

学習指導要領

知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育む

- ・ 「何のために学ぶのか」という教科等を学ぶ意義を共有
- ・ 資質・能力を三つの柱に整理し、教育課程全体を通して育成

当所のモットー

『やる気をおこそう
なせばなる
継続は力なり』

【体験活動】

- ・ 野外活動・自然観察
 - ・ 文化創作活動
 - ・ レクリエーション
- 豊かな心とたくましく
「生きる力」を育むための支援

県教育振興基本計画

【基本目標】

『夢や希望を実現し、ともに未来を創る鹿児島の人づくり』
～誰もが幸せや豊かさを感じられる地域や社会を目指して～

研究主題

自然体験活動を通じた児童生徒の非認知能力の育成

研究の柱

体験活動は、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」の基盤、子供の成長の糧としての役割が期待されている。

体験は、思考や実践の出発点である。思考や知識を働かせて実践し、よりよい生活を創出していくという体験の積み重ねを通して、自己との出会いと成就感・自尊感情の獲得といった非認知能力の向上を図ることができる。

そこで、当所での生活や活動プログラム及び主催事業における、自然体験活動を通じた非認知能力の育成について調査研究し、未来の社会の創り手となる人づくりに資する。

- (1) 非認知能力の育成と自然体験活動との関連性に関する情報収集及び調査研究
- (2) 児童生徒の非認知能力の育成を図るための活動プログラムの工夫・改善

研究の仮説

非認知能力と自然体験活動との関係性について、先行研究事例及び各種調査結果についての情報収集及び調査研究を進め、当所の活動プログラムや主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）において、活動プログラムの改善や構成の工夫により、非認知能力を効果的に育み、高めることができるのではないか。

研究の内容

- 文献及び各種調査結果に関する情報収集
- 先行事例に関する情報収集
- アンケートの作成
- 調査研究の修正
- 活動プログラムの工夫・改善（指導案）
- 主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）実施及び検証

研究概要図

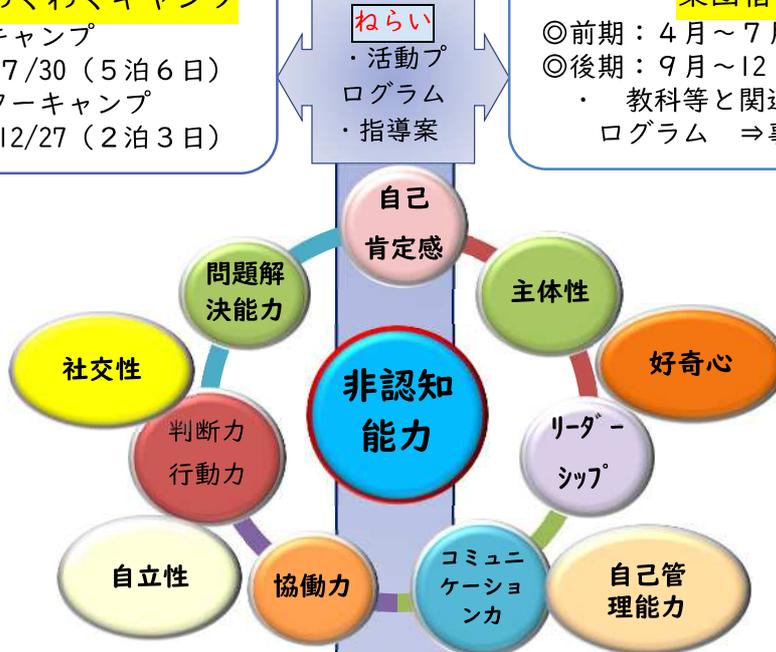
自然体験活動を通じた児童生徒の非認知能力の育成

悠遊学舎わくわくキャンプ

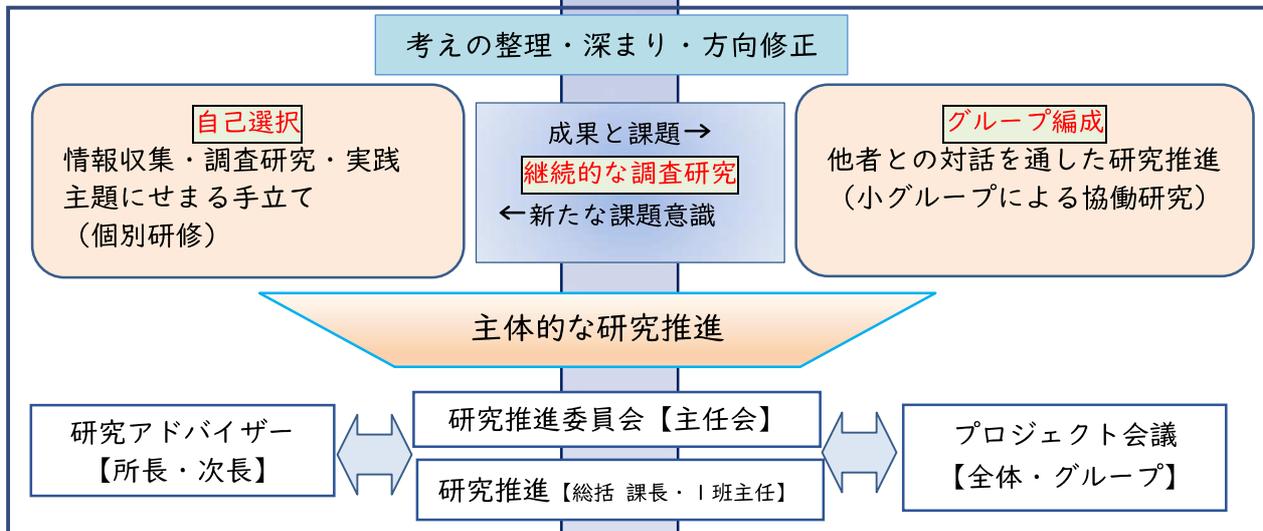
- ◎ サマーキャンプ
7/25～7/30（5泊6日）
- ◎ ウィンターキャンプ
12/25～12/27（2泊3日）

集団宿泊学習

- ◎前期：4月～7月(17校)
- ◎後期：9月～12月(22校)
・教科等と関連付けた活動プログラム →事前～事後指導



【調査研究組織・進め方】



〈年13回のプロジェクト会議(研究内容・主題にせまる手立て)〉

- 情報収集 アンケートの作成 調査研究方向性修正
- 悠遊学舎わくわくキャンプ企画立案及び検証
- R8 悠遊学舎わくわくキャンプ企画立案
- 活動プログラムの工夫・改善(指導案) 集団宿泊学習事前指導, 検証

II 研究の実際

I 非認知能力の育成について

非認知能力とは「客観的に数値化できない力のこと」

認知能力

例) 読み・書き・計算, 運動能力等
→客観的な点数化・数値化が可能
「非認知能力の向上」で高まりやすい

思考力
判断力
表現力

非認知能力

例) 意欲・やる気・忍耐力・自信等
→客観的な点数化・数値化が困難
「自分の意識」で伸ばせる

子供が「なりたい自分」を思い描き, その思いや願いに応じた具体的な言動について, 自分で考え, 意識して行動できるようにすることが大切

非認知能力育成のための大切な視点

1 指導者は, 子供が「なりたい自分」を意識できるような仕掛けや環境を意図的に作ることが大切である。

- (1) ねらいを伝え共有した上で, あえて具体的な指示や説明をし過ぎないようにする。
- (2) 自由に試したり, 仲間と協力したりする場面で, 指導者が助言し過ぎないようにする。

2 指導者は, 課題へのプロセス(過程)で, 子供の行動や変容を丁寧に観察・把握し, それを子供にフィードバックすることが大切である。

- (1) 子供の行動や変容を観察し, 把握
活動の中で, 子供の言動や変容における価値を様々な視点で見付ける。
- (2) 観察・把握後はフィードバック
言動や変容における価値を子供に伝え, 子供がその価値を意識できるようにする。

3 指導者は, 子供が自分自身の言動を客観的に振り返り, 自分自身の思いや願いに応じた行動の習慣化を図るために, 振り返りの場を設定し, その質を高めることが大切である。

①

<事実>

取り組んだことについて, 話したり文字にしたりする。

②

<①+感情>

取り組んだことについて, 自分の思いを話したり文字にしたりする。

③

<②+原因・理由>

なぜ自分がその思いになったのかを, 原因や理由を考えながら話したり文字にしたりする。

④

<③+今後の見通し>

改善策やこれからの方針について, 見通しを持ちながら話したり文字にしたりする。



【振り返り活動の質の高まり】

自然体験活動を通じた非認知能力の育成に対する考え方

自然環境の中での直接体験等を通じて、子供が自ら課題を発見し、他者と関わり合いながら解決を図る過程を大切にし、その資質・能力を総合的に育成する。

具体的には、予測困難な自然環境の中で、課題に直面し、試行錯誤を重ねながらも行動し、その結果を振り返る過程を大切にしていく。

明確な正解が得られにくい状況においても、自ら判断し、他者との対話や協働などの関わりを通して理解を深める学習の場を提供する。

集団での生活や協働作業によって、役割分担や意見調整、相互支援を行いながら、社会的行動や規範意識を実践的に学ぶ場を提供する。

活動内容によっては、選択や判断が求められる場面において、課題を解決することで、有能感を得られ、集団での活動によって、より良い関係性の形成を促す学習の場を提供する。

予測困難な状況への対応や、成功・失敗を伴う実体験を通じて、子供の非認知能力を高めるとともに、集団での活動を通して、他者を尊重し、自らの役割を果たしていこうとする態度を養う。併せて、自然や生命との関わりや、文化・歴史、環境や社会とのつながりを意識したり理解したりしながら、持続可能な社会の担い手としての必要な態度を養う。

自然体験活動は、単なる知識・技能の習得だけではなく、「生きる力」を育むための重要な要素として、非認知能力の向上に効果的であると考える。

2 非認知能力に関するアンケート作成について

調査の目的

本調査は、当所における生活や活動プログラム並びに主催事業における自然体験活動に着目し、それらが子供の非認知能力の育成にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、活動を通して育まれる自己調整力、やり抜く力、協調性、自己肯定感等の側面について、実態を把握し、体験活動の教育的意義及び効果を検討する。

本調査は、自然体験活動を単なる行事や経験として捉えるのではなく、子供の成長を支える基盤的な学びとして、その効果を明らかにすることを通して、未来の社会の創り手となる人づくりに資する知見を得ることを目指すものである。

調査の内容

自然体験活動を通して育成が期待される非認知能力について把握するため、質問紙によるアンケート調査を実施した。調査は紙面で行い、活動前後の変容を捉えることを目的とした。非認知能力の構成要素については、先行研究や体験活動の教育的効果に関する知見を参考にし、以下の11の観点から整理した。

- ・自己肯定感
- ・主体性
- ・リーダーシップ
- ・コミュニケーション能力
- ・協働力
- ・判断力・行動力
- ・問題解決能力
- ・社交性
- ・自立性
- ・自己管理能力
- ・好奇心

【図1 アンケート用紙】

これらの観点を基に、各観点につき3項目、合計33項目の質問項目を作成した。[図1]各項目は、日常生活や活動場面における子供の行動や意識の傾向を問う内容とし、非認知能力の実態を多面的に捉えられるよう構成した。

回答形式は4件法（「とてもよくあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」）とし、子供が直感的に選択できるよう配慮した。これにより、数値による傾向把握を行うとともに、事前調査、事後調査、追跡調査の比較を通して非認知能力の変容を分析できるようにした。

本調査内容は、特定の教科の学力ではなく、体験活動の中で発揮・育成される資質・能力に焦点を当てて構成したものであり、自然体験活動が子供の内面的な成長にどのように関与しているかを把握するための基礎資料とした。

〈アンケート調査の実施時期〉

【集団宿泊学習】

事前調査（事前学習前後）⇒ 事後調査（集団宿泊学習終了後）⇒ 追跡調査（約1か月後）

【主催事業】

事前調査（事前説明会時）⇒ 事後調査（事業終了直後）

工夫改善の視点

【視点1】

「事前学習」で、子供自身が「なりたい自分」を意識して行動し続けられるように、状況に応じた具体的な姿(言動)を具現化する。また、それを子供と指導者が共有する。

【視点2】

「活動中」及び「事後学習」で、指導者は子供の言動や変容について、把握したことを積極的にフィードバックする。

【視点3】

子供が自分自身を客観的に振り返り、その内容を言語化する力を高められるようにする。

工夫・改善の具体例(「野外協力ゲーム」の一部を抜粋)

(1) 概要版の「活動プログラムにおける目指す子供の姿(資質・能力)」の後に、本単元を通して高まりが期待できる非認知能力を明示した。[P25]

- 本単元を通して高まりが期待できる非認知能力

コミュニケーション力、協働力、判断力、問題解決力等

(2) 「単元計画」の【事前学習】の活動内容に、目標を焦点化する場を明示した。[P26]

学習過程	活動内容	時数	活動の場
【事前学習】 目標の焦点化	【特別の教科 道徳】 ・ 活動プログラムのねらいを知り、活動内容の一部を試技することで、解決方法や目標達成までの過程、方法を話し合い、合意形成のもと、課題解決するための目標の焦点化を図る。【視点1】	1	学校

(3) 【活動中】や【事後学習】において、振り返りを充実させるための取組を明示した。[P25]

【活動中】 課題解決に向けた試行錯誤	<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動のはじめに、個人及びグループの目標を確認する。(「なりたい自分」を意識する。) ・ 野外協力ゲームの活動を始める。 <ol style="list-style-type: none"> ① グループで話し合って決めた方法を試みる。 ② 試みた結果を受けて、再度、グループで話し合い、よりよい方法を模索し、合意形成のもと一つの方法に絞り込む(作戦タイム)。 ③ ②で決めた方法を試みる。 ④ ③の結果について、グループで意見交換する。 ・ 活動中に起こった出来事や言動から、成功体験や工夫、協力した姿勢などについて具体的に認め、今後の学びや成長につなげる。【視点2】 ・ 活動の終わりに、全体を振り返り、それぞれの思いや考えを共有する。 「取り組んだこと」、「自分の思い」、 「その原因・理由」、「今後の見通し」【視点3】 	1	センター
-----------------------	--	---	------

<p>【事後学習】 振り返り</p>	<p>【特別の教科 道徳】など</p> <ul style="list-style-type: none"> 活動前に立てた個人及びグループの目標について振り返りながらワークシートにまとめる。【視点2】（「なりたい自分」に近づくことができたか。） 活動を通して気付いたことをワークシートに記入する。【視点3】（例：新たな発見，他人の良かったところ，生活に生かせること 等） それぞれの思いを共有する。 これからの学校生活の中で、「今後の見通し（改善策や方針等）」を考え、実践につなげていく。 	<p>1</p>	<p>センター</p>
------------------------	---	----------	-------------

(4) 「2 単元について」の「(3)集団宿泊学習として取り扱う利点」に、非認知能力が高まる根拠について明示した。[P27]

(3) 集団宿泊学習として取り扱う利点

当所における集団宿泊学習での自然体験活動は、仲間とのつながりや自分自身を見直すよい機会となっている。子供自身が、多様な意見を受け止め、お互いを認め合う学級や学年の雰囲気醸成に役立つ。その結果、子供は感じたことや考えたことをより主体的に表現し、友達のことを理解したり、協力し合うことのよさや大切さについての考えを深めたりしていくことができるようになる。これらの変化は、非認知能力の向上に大きな効果をもたらすと考えられる。また、事前学習において集団宿泊学習のねらいに即した道徳的価値への関心を高めるとともに、事後学習において、体験を基に他の道徳的価値との関連にも気付きながら、自己の生き方について多角的・多面的に考えることで、それらを今後の生活に生かそうとする態度を養うことができる。

(5) 「3 活動プログラムの目標・評価の着眼点」に、高まりが期待できる非認知能力を括弧書きで記述した。また、「期待する具体的な学習状況」に、非認知能力の焦点化に関する項目を設けた。[P28]

3 活動プログラムの目標・評価の着眼点（高まりが期待できる非認知能力）

野外協力ゲーム（室内運動会）の課題を解決する活動を通して、友達について理解しながら、人間関係を構築していくことの大切さや、自分と異なる意見や立場を尊重する態度を養う。

（コミュニケーション力、協働力、問題解決力）

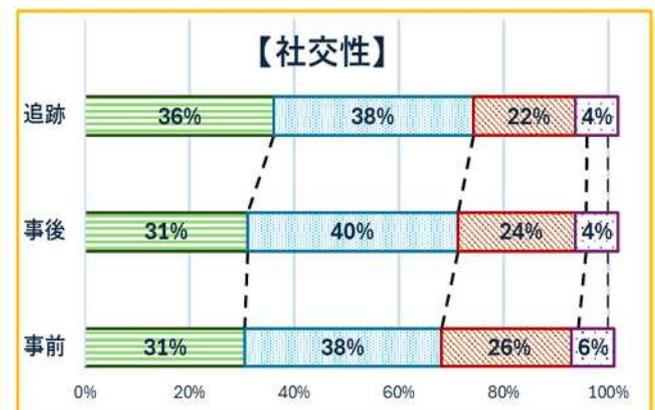
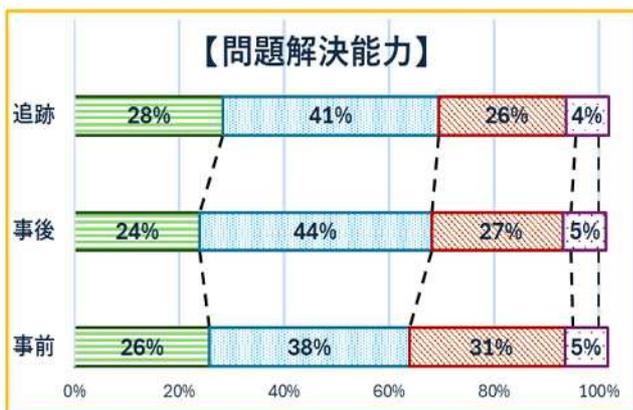
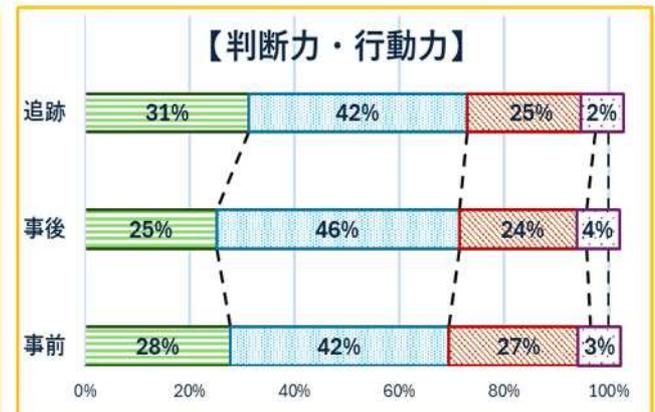
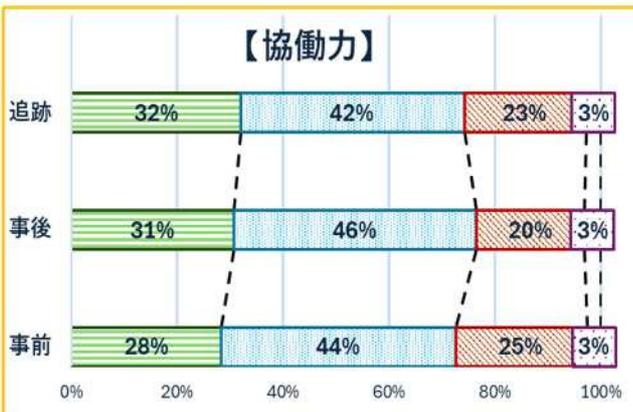
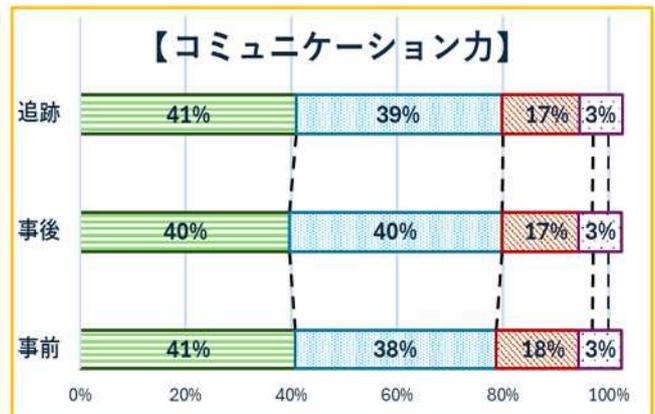
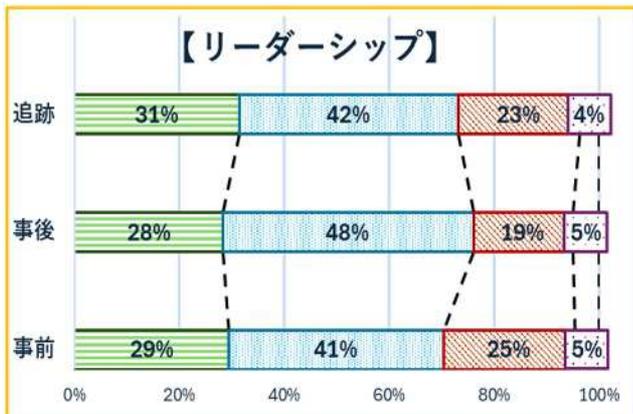
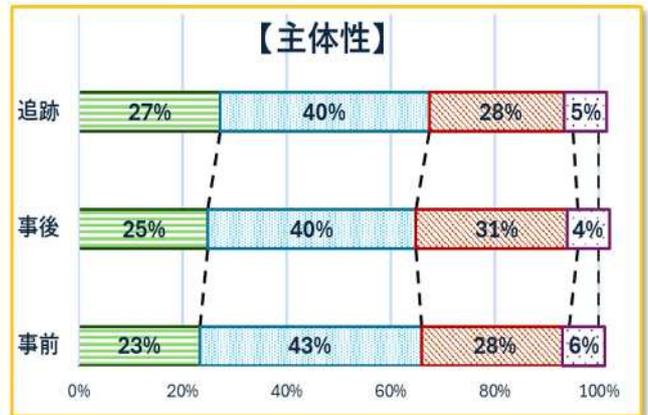
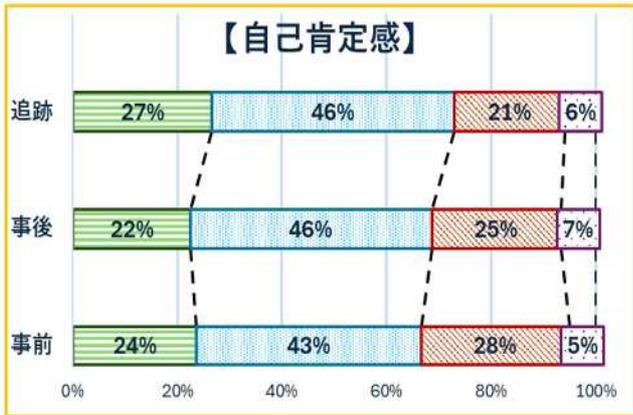
また、課題から解決の方法や約束について話し合い、合意形成を図り、自分の役割を意識しながら活動できるようにする。（協働力、判断力、問題解決力）

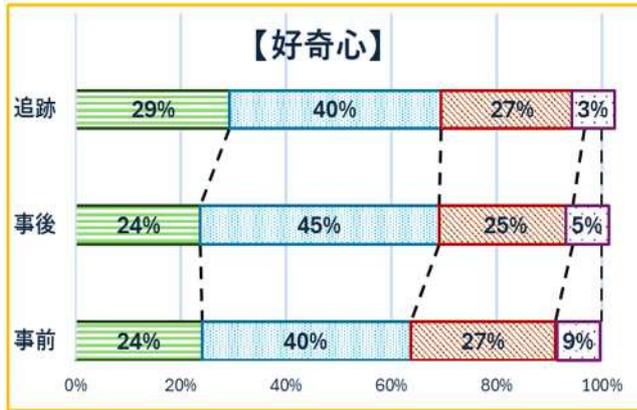
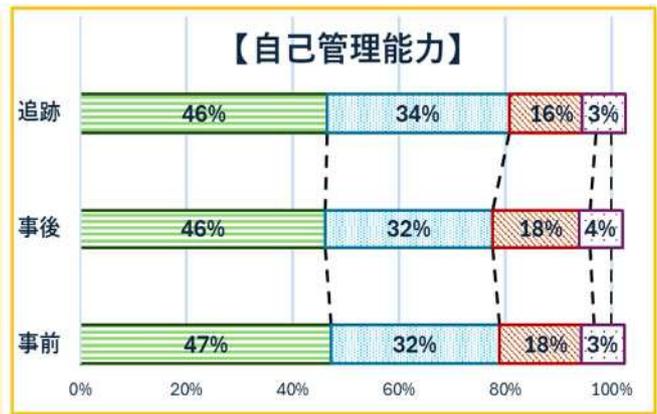
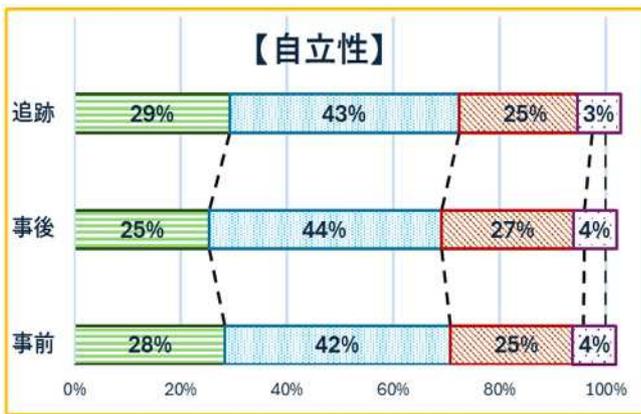
(6) 「(2)展開」の「指導上の留意点」に意識化や振り返りの質を高める働きかけ及び評価を記述し、(3)評価の観点に「価値に対する意識を高める様子」について明示した。[P29]

※ 一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する。特に担任は、すべてのグループの活動を観察できるように配置する。また、観察したよりよい言動をその場で子供たちにフィードバックする。〈行動観察〉

※ 複数の指導者で学習状況を把握するために、活動終了後、情報交換の時間を設定する。

4 集団宿泊学習における非認知能力の変容は？





ほとんどの項目において、事前の意識調査よりも向上が認められた。
中でも、自己肯定感、主体性、判断力・行動力、問題解決能力、社交性、自己管理能力、好奇心については、1か月後の追跡調査まで継続して伸びが見られる結果であった。

今回の調査に当たって、調査協力校3校には、担当の先生と打合せを行い、ねらいや指導内容を共有した上で、集団宿泊学習前に参加児童への事前指導を行った。また、各学級において、関連する教科等についての学習を行った上で、集団宿泊学習へ参加してもらう流れとした。さらに、集団宿泊学習後も意識が持続するよう、各校において振り返りやまとめを行うなどした。

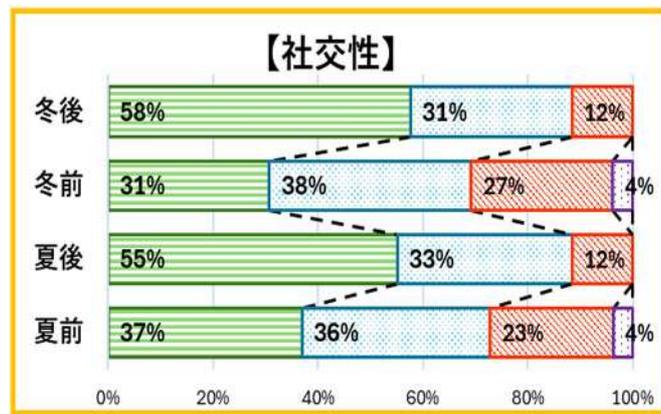
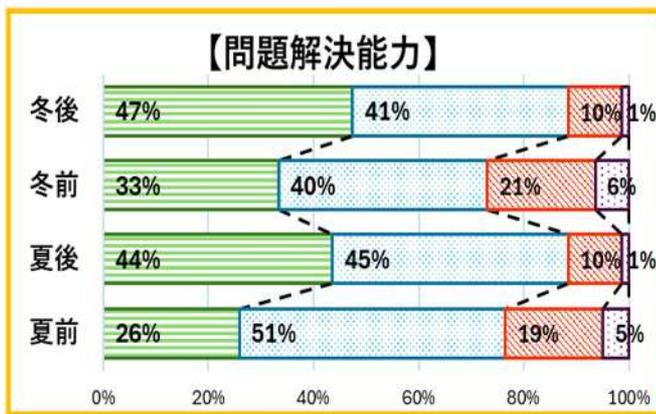
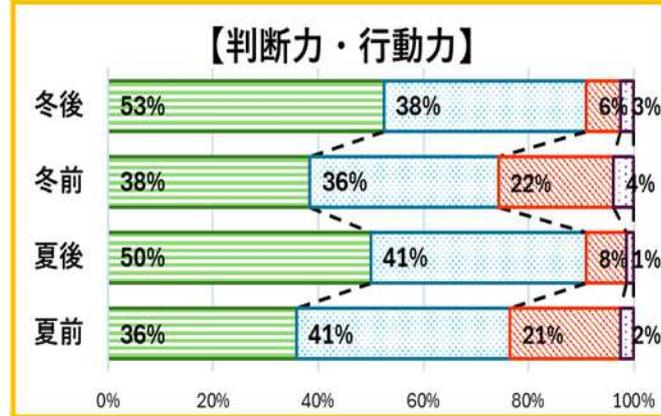
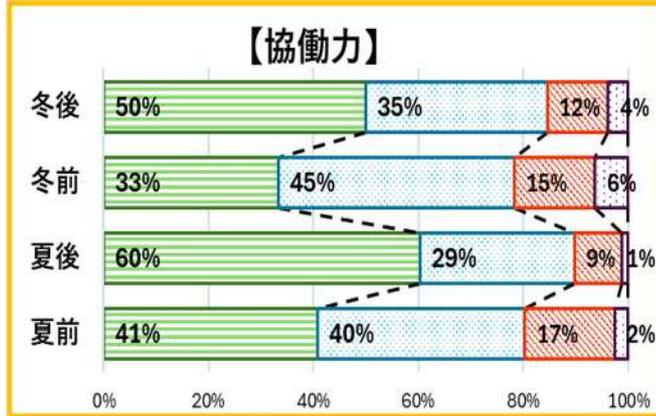
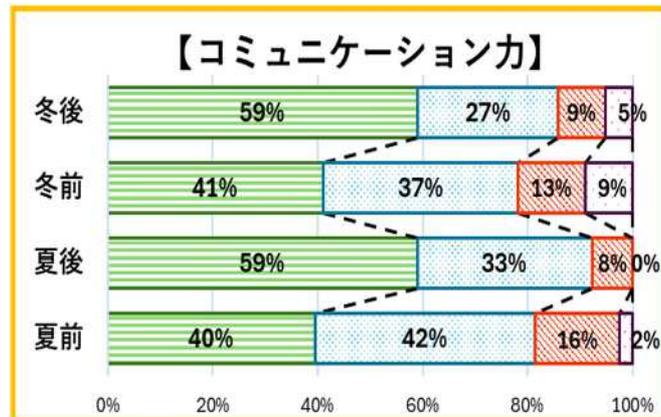
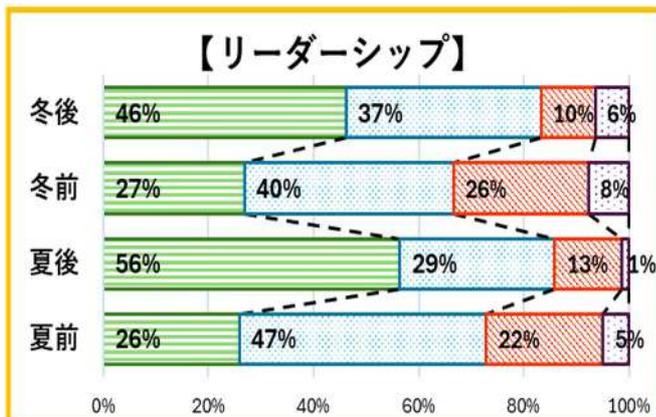
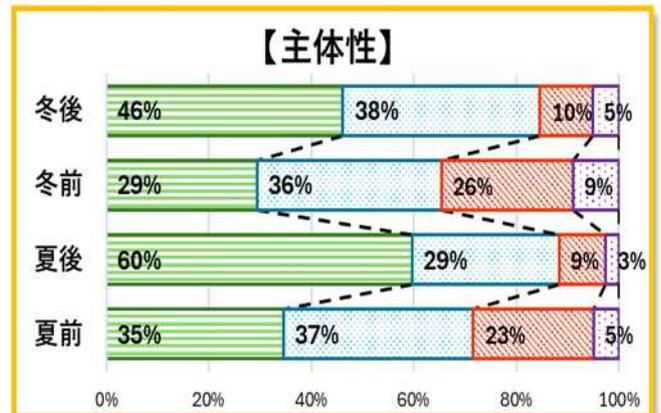
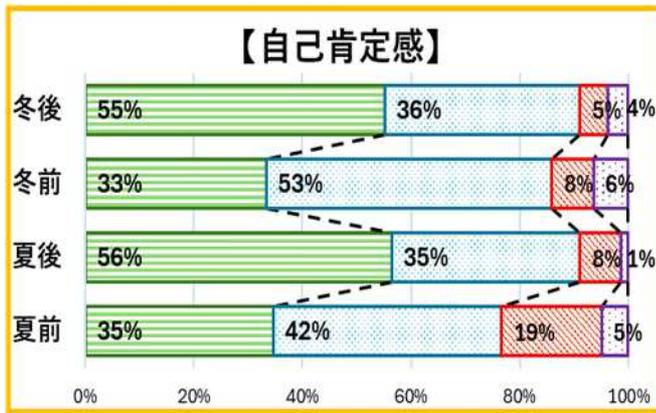
上記グラフは、調査校3校の結果を合算したものである。対象となる子供は、ほとんどの非認知能力の項目において、自己の成長を実感している回答となっている。

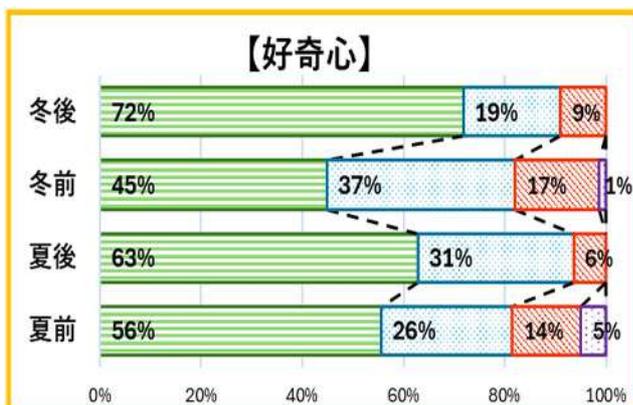
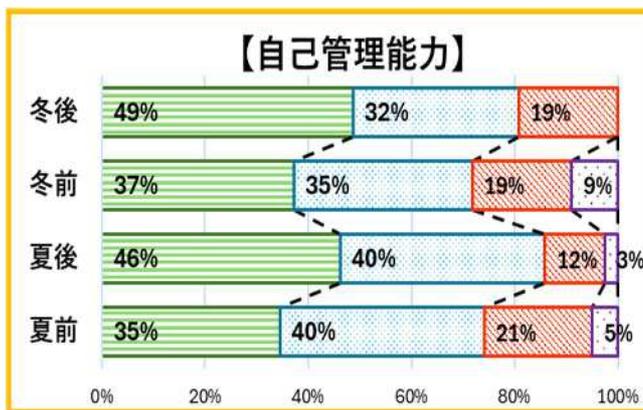
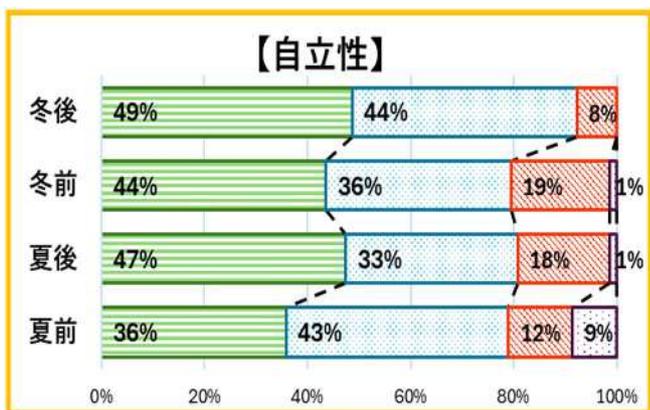
事前～事後（集団宿泊学習終了直後）においては、調査協力校3校の主な共通のねらいである「協力」に関する非認知能力「協働力」について、肯定的評価である「4」が28%→31%、「3」が44%→46%とともに増加していた。なお、「4」については、事後1か月の段階でも更に増加していた。

事前～1か月後の追跡で見ると、自己肯定感、主体性、判断力・行動力、問題解決能力、社交性、自己管理能力、好奇心において、集団宿泊学習終了1か月後まで継続して非認知能力の高まりを感じている子供が増えている。（肯定的評価「4」・「3」合算で、自己肯定感が67%→73%、主体性が66%→67%、判断力・行動力が70%→73%、問題解決能力が64%→69%、社交性が69%→74%、自己管理能力が79%→80%、好奇心が64%→69%）また、中でも「4」と評価した子供が増えており、各学校へ事後に聞いた様子からも、子供の行動が明らかに変わってきたという声が多く聞かれた。

これらのことから、調査協力校の引率者とねらいを共有し、協力して指導に当たったことで、指導の一貫性、継続性が図られ、子供の様々な非認知能力の育成が図られたと考えられる。

5 主催事業「悠遊学舎わくわくキャンプ」における非認知能力の変容は？





夏・冬の事業後はいずれの項目でも肯定的回答が増加し、非認知能力の向上が認められた。

また、夏前→夏後→冬後の縦断比較からは、主体性・協働能力・コミュニケーション力・好奇心などを中心に、夏で大きく伸び、冬でさらに定着・深化する傾向が読み取れる。

本事業のアンケート結果を夏前・夏後・冬後の縦断で分析すると、非認知能力は「夏で芽生え、冬で定着する」発達過程をたどっていることが明らかになった。数値データでは、主体性、協働能力、コミュニケーション力、好奇心等において、夏後に肯定的回答(4・3)が大きく増加し、冬後も高い水準を維持している。一方、自己管理能力や自立性は夏後の伸びは緩やかであるが、冬後にかけて安定的な向上が見られ、年間を通した継続的な体験の効果が認められる。

この変容の背景として、参加者の自由記述からは「みんなで声をかけ合ったら最後まで歩けた」「自分の意見を聞いてもらえてうれしかった」「失敗したけど仲間が助けてくれた」といった言葉が多く見られた。これらは、数値上でも伸びが顕著であった協働能力やコミュニケーション力、自己肯定感の向上と対応しており、仲間との関わりが非認知能力の発達を支えたことを示している。

指導面では、自然体験や生活体験を通して、子供同士で考え、話し合い、助け合わなければ前に進めない活動構成とした。指導者は過度に介入せず、必要な場面で問い返しや振り返りの時間を設けることで、子供自身が気づきや達成感を得られるよう工夫した。さらに冬の事業では、夏の経験を想起させながら役割分担や協働場面を意識的に設定した。

その結果、夏で芽生えた「やってみよう」「仲間とならできる」という感覚が、冬には自信や行動として定着し、未来を生きる力へとつながる非認知能力の育成が図られたと考えられる。

「悠遊学舎わくわくキャンプ」活動の様子



【Instagram: サマーキャンプ ウインターキャンプ】